

2012年12月10日  
テオリア第3号

定価 350円  
毎月10日発行  
定期購読料 年間 4000円  
半年 2000円

郵便振替口座 00180-5-567296 研究所テオリア

# θεωρία テオリア

発行 研究所テオリア  
東京都千代田区内神田1-17-12  
勝文社第二ビル101  
TEL&FAX 03-6273-7233  
ホームページ  
http://theoria.info  
E-mail: email@theoria.info

## 「デモ論」—— 社会は変わるのか



デモ論の震源となった脱原発行動は続いている—11月11日、国会前

いま「デモ論」を問う

2012年は日本社会でデモが社会的に復権した年となった。様々なテーマでのデモ・行動が活発となり、脱原発デモには10万人が集まった。私たちの発足シンポジウムでもグローバル対抗運動の一環としての脱原発デモの評価が論点の一つとなった。

今号ではデモ論を改めて取り上げた。デモ論と言っても論点は多岐にわたる。西村光子「脱原発官邸行動と政治の関係性」では、脱原発の思いを可視化した官邸行動の成果を踏まえ、脱原発の政治的課題の実現のために問われていることを論じている。

西郷西善蔵「デモ論についての若干の考察」では、「移動する制憲議会」としてのデモの持つ意義、そして主体形成を無視して日常生活の延長としてのデモを美化する一部の論調を批判している。

吉田和雄「デモと政治の交差する先にあるものは」では、デモが政治の争点を作り出したことを評価し、これからの課題について論じている。

今回は序に過ぎないが、今後も継続して取り上げていくつもりである。(S)

### 座標塾第IX期 (2013年1月~3月)

- 第1回 デモは社会を変えうるか 1月17日(木)
- 第2回 世界経済危機の行方 2月14日(木)
- 第3回 領土って何だ— 国民国家の超え方 3月21日(木)

講師 白川真澄  
時間 午後6時半~9時  
会場 文京シビックセンター  
参加費 通し2500円(1回1000円、会員500円) 要申込  
連絡・申込先 研究所テオリア  
03-6273-7233  
email@theoria.info

### 講座テオリア第1期講座

「シリーズ・グローバル資本主義の行方」  
講座第1回 「世界金融恐慌のクラクリを暴く」  
D・ハーヴェイ『資本の「謎」を中心に』  
12月19日 午後6時半  
講師 森田成也さん(マルクス経済学者)  
会場 文京シビックセンター15階B  
参加費 一般千円/会員500円  
主催 研究所テオリア

### 紙面紹介

脱原発官邸行動と政治の関係性 西村光子…………… 2面  
 デモ論についての若干の考察 西郷西善蔵…………… 3面  
 デモと政治の交差する先へ 吉田和雄…………… 4面  
 被ばく労働ネット/ガサ攻撃抗議…………… 5面  
 座談会 障がい者の支援とは…………… 5面  
 「コミュニティ」をどうつくるのか…6~7面  
 横堀団結小屋強制執行/オルタ提言シンポ…………… 8面  
 「グローバル金融資本主義の危機」の時代に求められるもの」は休みます。

年末カンパを呼びかけます  
郵便振替口座00180-5-567296

研究所テオリア

# 脱原発官邸行動と政治の関係性

## 次のステージに上がるために

西村光子

いま「デモ」論に注目が集まっている。デモ論の震源は脱原発―なかでも原発再稼働反対を叫んで急激に人びとを集めた官邸前行動であろう。

だが、次の金曜日の夜、官邸前に集まった人たちは1万人をはるかに超えていた。数を数えたわけではないが、歩道をぎっしりと埋め、車道に三重・四重とみだした人たちの列が霞が関の駅の方へ連なっているのが見えた。私は2時間突っ立ったまま、お念仏のように「再稼働反対」をとなえながら、身体が震えるような興奮に包まれた瞬間があったのを憶えている。多くの人たちの「脱原発」の思いが可視化されたのだ！

そして、翌週の金曜日、10万人と言われている人たちが官邸前に集まり、道路を占拠。6時〜8時と決められた集会の終了10分前に主催者側と警官が一緒になつて解散を宣言した。

これを機に警官隊は警備を強化する。参加者は地下鉄の改札口から警官に誘導される。人びとはたいした抵抗も示さずそれに従うが、面白いことに演説台が国会議事堂前にも出現したのだ。「アミーバみたい」

問題は、クレームの構造が再稼働を進める政府と反対する脱原発をめざす人びと―2者の対立構造になつていくことである。2者の構造は労働組合の論理である。互いの最大限の利益を獲得する闘いである。政治は2者だけでは決着をつけることができない。さらに第3、第4の他者の参加が必要である。

「99%の反乱」である。1%の富裕者に富が集中。99%が生活困難者になつたことへの異議申し立て。99%の人びとは多様である。ニーズも多様である。危機の元凶である大銀行・大企業への規制を強化し、地域バンク、地域投資を推進させようという提案から、雇用・住宅・医療・学資ローンまでさまざまな課題が列挙される。

① したがって重視されることは話合いです。カフエでの話合いです。グループでの話合いです。さまざまな段階があるが、「民衆による全体集会」での話合いが最も重視され、それが成功させるためにワーキング・グループが活躍し、人びとがマイクなどの方法が駆使された。

② 決定の方法は、完全な同意である。「決定は投票でなく、全体の賛同によって民主的に行われる」という評価を得ている。この直接民主主義はアナーキズムの影響とみられている。ただ、堤未果によれば、全員が賛成しないといけないという形式と行動できないという形式は、各自の行動を縛るものとして批判もあるようだ。

③ 政府は必ず嘘をつく。④ 占拠地は「平等主義的生活を1日24時間実践する実験の場」と位置づけられている。この「平等主義的生活」とは、「権力獲得後に人民の平等をめざす」と考えた従

### 官邸行動と閉塞感

7月29日、11月11日とイベント的な大行動をほさみながら、官邸前行動に参加する人びとの数は減少している。参加者の減少は織り込み済みだろうか、問題は閉塞感が漂い始めたことだろう。

官邸前行動の主権者・首都圏反原発連合は、組織の構成員としてではなく1人の市民として参加するよう要請した。その市民たちは、閉塞感がどこから来たのか考える間もなく、野田が仕掛けた突然の解散劇のなかで、1人1人が「政治」を

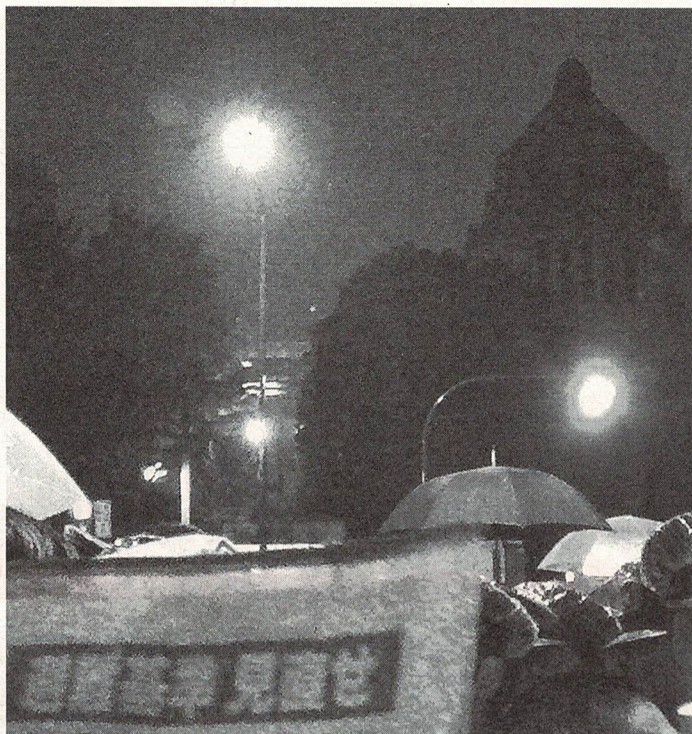
手繰り寄せていかなければならないことになった。脱原発の官邸前行動(デモ)占拠と政治はどんな関係にあるのか。それが私の取り上げたいテーマである。なぜなら、「脱原発」という「政治的課題」の解決は、政治的視点・政治的布陣をもたなければ、なされ得ないからである。

官邸前行動は、再稼働にNOを突きつける行動として人びとの共感を生んだ。それは異議申し立て・クレームの行動である。クレームという言葉は「い

これら羅列した項目を眺めるだけで、日本の官邸前行動の姿がふりだされるように、面白い。特に項目4については、さまざまな議論がされている。官邸前行動は、金曜日の夕方2時間、自分の生活を変えないで参加できるといふ枠組みが「だからこそ多くの人たちが参加し得ている、だからこそ継続し得ている」という評価を得てきた。主催者が警官と協調して警備にあたるのも、これを論拠としている。

これについては、60年代、70年代、80年代のデモや新左翼の行動をどうみるかと関わりあっている。当然、

私はいまも体力と時間がある限り、脱原発官邸前行動に参加している。シユプレヒコールを叫び、人びとのアピールを聞く、心が解放される思いがあるからだ。ときに苦行という言葉が横切ることもあるが、大事に続けていきたいと思う。



11月11日、国会前

### オキユパイ運動の特徴

官邸前行動に先行する間もなく、野田が仕掛けた突然の解散劇のなかで、1人1人が「政治」を

官邸前行動に先行する間もなく、野田が仕掛けた突然の解散劇のなかで、1人1人が「政治」を

官邸前行動に先行する間もなく、野田が仕掛けた突然の解散劇のなかで、1人1人が「政治」を

官邸前行動に先行する間もなく、野田が仕掛けた突然の解散劇のなかで、1人1人が「政治」を

官邸前行動に先行する間もなく、野田が仕掛けた突然の解散劇のなかで、1人1人が「政治」を

官邸前行動に先行する間もなく、野田が仕掛けた突然の解散劇のなかで、1人1人が「政治」を

官邸前行動に先行する間もなく、野田が仕掛けた突然の解散劇のなかで、1人1人が「政治」を

### 脱原発は政治的課題

私が一番残念に思うのは、二一スが「脱原発」に絞られ、曜日を変えて官邸前に集まっている「反貧困」、「反TPP」、「消費増

税反対」、「ネット規制反対」と決して交差することがなかつたことである。10月4日の木曜日に「オスプレイ配備反対」の官邸前行動

に参加したときのこと。主催者が何度も「今日はネット規制反対の行動の方は官邸の後ろで行動していただきます。この場所をゆずっていただいてありがとうございます」という趣旨の発言をするのを聞いて、何で一緒にやらないのか、正直、首をかしげた。

先にも述べたが、脱原発は政治的課題である。原子力ムラ、過疎に悩む原発立地自治体の経済的自立、除染やがれき処理をめぐる税金の動き方など、追求すれば多様な人びとが議論に参加し、考えを変え、生活を変え、社会を変え得る課題であり、また同時に脱原発は社会変革なしに成り得ない。議論しあうという機会の設定がなかったのは、残念の2乗である。

私はいまも体力と時間がある限り、脱原発官邸前行動に参加している。シユプレヒコールを叫び、人びとのアピールを聞く、心が解放される思いがあるからだ。ときに苦行という言葉が横切ることもあるが、大事に続けていきたいと思う。

# デモ論についての若干の考察

西葛西 善歳

## 「英雄的」行為だった デモ

私が1980年代に反体制運動の活動家になったとき、デモに出るといふことは何かと「英雄的」な行為だった。反戦・反安保や成田空港二期工事反対を主張するために、デモで都心や農村の車道を歩くこと

は、ひょっとしたら警察に逮捕されるかもしれないという不安を克服しなければならなかった。労働者が逮捕されれば仕事を失うかもしれない。もちろん逮捕も解雇も不当に決まっているけれども、それでも

逮捕され解雇されてしまえば、生活が出来なくなる。デモ参加者は誰でもそうした不安をのりこえながら、街中をデモ行進していたのである。

その結果、何が起きたか。〈社会変革を目指す主体〉が生まれたのだ。市民の公的活動に介入してこれを規制するという警察の越権（脱法）行為を批判し、警察の弾圧攻勢をはねかえす

ために、一人一人が精神的にいわば「武装」したのである。「獄入り意味多い！(591-1301)」という語呂合わせで、私たちは万一逮捕された場合を想定して、救援連絡センターの電話番号を暗記したものだ。そうした活動が反復されることで、弾圧に屈服しない主体の構築が目指され、実際に構築されたのであった。そんなデモに参加する日々を、私は20年前に



2011年3月

3・12フクシマ原発事故により、私はほぼ20年ぶりにデモに参加したことになる。都心で万単位の人びとが集まるのは本場に久しぶりのことであるし、参加者の顔ぶれのなかにも新しい人たちが増えていた。そのこともあって、このデモをどう評価するかという議論が論壇の一部でも出てきたようである。

柄谷行人『政治と思想1960-2011』(平凡社ライブラリー)は、「デモをすることで何がかわるのか」と他人からよく問われるという。もちろん質問者

## 「デモをすることで何がかわるのか」

が言いたいのは「デモなんかしても原発をなくすことなどできないでしょう?」ということ。これに対する柄谷の答えが面白い。「デモをすることで日本が『人がデモをする社会』に変わる」というのだ。これは確かに重要。何かおかしなことがあればデモが起きる社会は健全な社会だからだ。

しかし日本では70年代にデモ文化そのものが衰退してしまっただけで、柄谷はその原因を新左翼の暴力的なデモ戦術が日本のデモ文化を破壊したことにある。しかし私はそうは思わない。デ

モは新左翼政治派の独占物ではなかったからだ。杜共々総評のいわゆる「平和的なデモ」が、新左翼のデモとは別に毎年のように行なわれていたのだから。

移動する制憲議会としてのデモ

しかしそれでも日本のデモ文化は衰退した。その理由を分析する紙幅はないので、ここでは一点だけ指摘したい。それは70年代の低成長下でもまだ続いた右肩上がりの経済により、民衆の不満を経済主義的に吸収するだけの余裕が社会(資本と国家)の側にあったこと、そして80年代に入ってから田高による消費社会の成立が、人びとの政治意識を急速に解体させることに「成功」したということである。

柄谷は、投票行動が人々を有権者にするのではなく、投票を抽象的で統計学的な量に還元してしまうという。これでは民主主義は機能しないと。では、個人が主権をもった主体として存在するためには、どうすればよいか。それは割合、簡単に、直接行動、すなわち、議会選挙以外の政治行動(波書店)がくわしい。

## デモ論の貧困と「終焉」の危機

こうしたカオス状の集合行為を「院内」と「院外」に分断しながら院外のデモが院内の政党政治への政策的フィードバックを実現することを夢想するのが五野井郁夫『デモ』とは何か(NHK出版)である。院外(デモ)を院内(政党政治)に従属するものと考え

ている時点で、五野井は六〇年安保闘争(いまや五〇年以上前!)の頃の進歩派文化人のカリカチュアではない。柄谷が問題としたような選挙制度が人びとの多様な要求を統計学的に還元してしまうことの問題点についても気づいていないようだ。五野井にとってデモとは、国家権力の手のひらの上で踊ることではないのである。まったく知らない話だ。

小熊英二『社会を変えるには』講談社現代新書も、もちろんそれは良いことである。しかし、デモ全体が何かそうした日常社会の延長線上にある風景と化したとき、それはデモの本当の論理(田原牧)を内面化した運動は良いというのでは、そんな理屈はこれから運動によって早晩否定されるだろう。

最後に、80歳を超えた長老ノム・チョムスキー『アメリカを占拠せよ!』(ちくま新書)の巻末には、オキュパイ運動で逮捕された人向けに警察取調べ対処法が紹介されている。米国では「おまわりの論理」ではなく、「おまわりに抗する論理」がきちんと若者たちに継承されるように努力が今も続けられていることを知っておきたい。

親が子連れで参加できるような抗議行動が、この夏国会前に現出したと聞く。もちろんそれは良いことである。しかし、デモ全体が何かそうした日常社会の延長線上にある風景と化したとき、それはデモの本当の論理(田原牧)を内面化した運動は良いというのでは、そんな理屈はこれから運動によって早晩否定されるだろう。



1980年代のデモ

# デモと政治の交差する先にあるものは

## 吉田和雄

### 緊張感のないデモもいい

3・11後の脱原発デモを、年ごろまでのデモとは大きく異なると、「こういう楽しくて緊張感のないデモもいいものだ」ということになるだろうか。それでいて、次は何人集まるだろうかとか、昔からの活動家だったか、知人に20年ぶり、30年ぶりに出会ったりする同窓会的な雰囲気、それが2010

な事後処理がなくてよかったとも思う(一部のデモでは狙い撃ち的に逮捕者が出ていることも承知しているが)。規制だらけの国会講願デモより無届けで、より自由な気もある。

### デモする自由と

### 権利の行使

6月の「再稼働反対」を叫んだ国会前デモは、車道まで埋め尽くし、占拠した人々が機動隊のカマボコ(人員輸送車)の前までせりだして、次週は国会突入や官邸占拠もできるのではないか」と期待してしまっ

私はデモのことを考えるに、いつも福富節男さんのことを思い浮かべる。93歳になられ、現在も健在な福富さんは、足が不自由になり脱原発デモの体験はされたいなと思われが、常々彼はどうしたら通行人

ら地下鉄の出入り口から規制されてしまった。それでも主催者はなかなかしたたかで、官邸前集会在野に延びることになった。

され、私たちに熱っぽく語りかけてくれた。福富さんが官邸前デモの様子を見たり、5万人集会や10万人集会を見て、例えばイラク反戦運動期のデモ・集会と比較したり、ベ平連のデモと比較したらどのような感想をもつのか、一度お聞きしたいと思っている。

反権力のデモ、少数派の意思表示としてのデモに慣れた私にとっては3・11後のデモは新鮮であったことは事実だ。余談だが、反権力デモでも、三里塚のジェット燃料輸送阻止闘争で成田市内を第四インターの諸君と合流し15列の隊列で機動隊の阻止線を突破した時は、デモが機動隊を粉砕できた実感した。



11月11日、国会前

国会前デモとは違うが、昨年の高円寺デモで6千人、1万人集まったのも衝撃だった。何か新しい流れが作り出され始めたのだ。

6月の国会前デモは後日知ったことだが、主催者が人出の多さによってどう対応したらいいかかわらなくなると警察のマイクで解散を呼びかけ、次週か

### 脱貧困10万人デモ 実現への課題は

問題はここから先だ。

現在の状況はこれまでの日本の社会運動史でも大きな転換点となるのではないかと感じている。これまでのデモ、直接行動は、70年代の安保闘争でも三里塚闘争においても政治・選挙との関係・緊張関係はほとんどなかったのではないかと。74年戸村選挙や中山千夏の参院選挙のように議会選挙と直接行動を結びつけたことは何度かあったが、

これまで、私たちが取り組んできた闘争課題は、三里塚にせよ、反安保にせよ、社会的には少数派の課題であり、市民の「多数派」の共通課題ではなかった。だが、「脱原発」は世論の多数派の課題となつて持続している。これを可能にしたのは紛れもなく脱原発の様々なデモである。デモが政治の争点を作り出したのだ。

11月17日、基地づくり！海づくり？天皇の沖縄訪問反対！緊急行動による銀座デモが行われた。

### 天皇の沖縄訪問反対！ 緊急行動

11月17日、沖縄・糸満で「全国豊かな海づくり大会」が行われた。これは「復帰40周年記念事業」の一環として行われた天皇出席の儀式。豊かな海を破壊する名護市辺野古での海上基地建設計画が続けられ、「復帰」前後のヤマト資本による大規模開発で沖縄の海が大きな環境破壊を受け

### 宇都宮けんじさんと東京から脱原発を



11月27日、日比谷野外音楽堂で「宇都宮けんじさんと東京から脱原発を！大集会」が行われた。

先どうするか。どうなるのか。私がおもう一つデモ・直接行動で政治を変えたいと思ふのは、反貧困・脱貧困の10万人デモの実現である。生活保護世帯200万人と非正規労働者2000万人が分断を乗り越えて結合して実現できないものか。



11月17日、基地づくり！海づくり！天皇の沖縄訪問反対！緊急行動による銀座デモが行われた。島ぐるみの運動が盛り上がりつつある状況を考えるならば、天皇、日本政府が「豊かな海づくり」などというのは欺瞞そのものだ。17日は水谷橋公園で簡単な集会が行われ、立川自衛隊監視テント村などが発言。続いて、雨の中、銀座デモへ。

出発直後に宣伝カーが動かなくなるといふハプニングに見舞われたが、50人の参加者は右翼と警察による妨害をはね返し、デモを行なった。

# 停戦しても占領とガザ封鎖は続いている

## ガザ攻撃に抗議行動

11月14日、イスラエルによるハマス司令官暗殺で開始されたガザ攻撃が8日間続き、21日停戦となった。その間、160人以上のパレスチナ人が殺害され、千人以上が傷ついた。このイスラエルの虐殺をオバマ政権は自衛権として支持。日本政府は、パレスチナ側にロケット弾発射中止を要求しながら、イスラエルに対しては自制を求めるにとどめ、イスラエルが攻撃を開始したことを不問にするというイスラエル寄り姿勢を示した。日本のマスコミ報道でも、多くはイスラエルとガザの武装勢力間の対等な戦闘であるかのように報じられ、一部ではハマスによるロケット弾発射だけがクローズアップされ、問題の本質であるイスラエル

による占領と封鎖は隠蔽された。

11月18日には「ガザ攻撃を止める！イスラエル大使館前緊急行動」がSTOPガザ攻撃緊急行動の呼びかけで行われ、市民が大使館に抗議の声をあげた。

11月25日、緊急行動の呼びかけで、「停戦しても占領とガザ封鎖は続いているSTOP！ガザ攻撃11・25緊急集会」が開かれた。

集会で奈良本英佑さん（アル・ジスル＝日本とパレスチナを結ぶ）代表は「イスラエルは平和を望んでいない。自分たちに有利な平和も望んでいない。今回の不均等な戦争は周到に準備された攻撃。イスラエルが殺した司令官は、停戦

交渉のハマス側の中心だった。そういう人物を殺すということは、イスラエルは何としてもガザで戦争をしたかった。

イスラエルは「テロリスト」がアパートの一室にいて、アパート全体を吹き飛ばし、数十人を殺傷する。イスラエルの対テロ戦争は米国のアフガン・パキスタンでやっていること。

今回特徴的なのは、欧米が一致してイスラエルを支持したこと。アラブ諸国はガザへ強く連帯した。

ガザは天井がない牢獄。食料・水不足、停電はしょっちゅうで牢獄よりひどい。ロケット弾は支持しないが、パレスチナ側に何もするなというのは無理」

を投入しておかしくなかった。

だが、ロケット弾を撃てばイスラエルの攻撃で民間人が殺され、地上戦になれば何千人も命が失われるのが解っていて、冒険主義的に攻撃するハマスの判断が

政治判断として正しいのか。民衆を盾にした瀬戸際作戦の政治はやめろということ。

今回、カタール首長が初めてガザ訪問した。私が読んだアラブ紙は今回の事態を一番喜んでるのはシリアのアサドだと指摘していた。これまでアラブの左派知識人はハマスはイスラエルに抵抗しないと批判して

いた。今回の事態はハマス・湾岸諸国連合とヒズボラ・シリア・イラン・枢軸との「アラブの大義」をめぐる正統性争い。一番貧乏くじを引いたのがアッバス。

今後どうすべきか。イスラエルは建国から世代が経ち、歴史修正主義にどっぷり浸かっている。日本における拉致問題と同じだ。

日本人としてやるべきことは何か。イスラエルにもこの国の政治を変えていくことが必要だ」



イスラエル大使館抗議=11月18日

田原牧さん（東京新聞デスク）は「私はハマスに批判的。今回テルアビブ・エルサレムにロケット弾が届き、イスラエルでも3人死亡。イスラエルが陸上兵力を投入しておかしくなかった。だが、ロケット弾を撃てばイスラエルの攻撃で民間人が殺され、地上戦になれば何千人も命が失われるのが解っていて、冒険主義的に攻撃するハマスの判断が政治判断として正しいのか。民衆を盾にした瀬戸際作戦の政治はやめろということ。今回、カタール首長が初めてガザ訪問した。私が読んだアラブ紙は今回の事態を一番喜んでるのはシリアのアサドだと指摘していた。これまでアラブの左派知識人はハマスはイスラエルに抵抗しないと批判していた。今回の事態はハマス・湾岸諸国連合とヒズボラ・シリア・イラン・枢軸との「アラブの大義」をめぐる正統性争い。一番貧乏くじを引いたのがアッバス。今後どうすべきか。イスラエルは建国から世代が経ち、歴史修正主義にどっぷり浸かっている。日本における拉致問題と同じだ。日本人としてやるべきことは何か。イスラエルにもこの国の政治を変えていくことが必要だ」

# 原発・除染労働者の安全と権利を

## 被ばく労働者を考えるネットワーク設立

11月9日、東京・亀戸で被ばく労働者を考えるネットワークの設立集会在行われた。福島第一原発では、これまで高い被曝環境での除染作業が続いている。多量の放射性物質が広範囲に撒き散らされた地域での除染作業という従来の原発労働とも異なる被曝労働環境での労働となっている。原発労働者、除染労働者はじめ被曝環境にある労働者を支援し、問題に取り組むためのネットワークとして準備が進められ、この日発足となった。

設立集会は280人がつめかけ、会場はいっぱいに発足して定期検査ができた。敦賀原発では事故隠しがきつかけに労組をつくって原発労働を告発した斉藤征二さん（全日本運輸一般労働組合原子力発電所分会・元分会長）は「私が最初に原発に関わったのは44年前の美浜原発建設。

呼ばかき人として、原発労働の実態を長年追ってきた樋口健二さん（写真家）が発言。「こんな時代が来るとは想像もしていなかった。昨年からは全国から呼ばれるようになり、被曝労働の実態が闇の中から浮かび上がった。これからの「正念場」

81年敦賀原発の事故隠しをきっかけに労組をつくって原発労働を告発した斉藤征二さん（全日本運輸一般労働組合原子力発電所分会・元分会長）は「私が最初に原発に関わったのは44年前の美浜原発建設。

戦争中の赤紙を思い出さず。若い人もたくさん原発労働に行っている。原発に携わる人がいなければ原発は動かない、収束作業もできない。原発は止める、なくすが原則」

続いて、桂武さん（全国一般いわき自由労働組合）から福島現地の報告が行われた。

「現在、除染作業の危険手当（特殊勤務手当）の問題で労働者4人がI社と団交している。今日団交したが、物別れだった。特殊勤務手当は環境省から1日1万円出る。それが2次請けで1日2千円、3次請けで1日



100円になってしまふ。これも違法ではないとIか月分の支払い命令しか出さない。環境省は1万5500円でもかまわないという答え。厚生労働省、環境省のひときはネットワークが力をつけて交渉しないと直らない。

団交でI社の1人が広野町では除染作業しても手当が出ないから、1万円の手当を出したら広野で働いている労働者が不満を持つと発言を吐いた。被曝すると覚悟して働いている労働者を馬鹿にするセネコンの下請けの本音だ。

福島第一原発の労働者の雇用問題も取り組んでいる。彼らは皆、1日1万円以下で年収200万円以下。社会保険加入もない。I社は「最初から最低賃金の契約で合計1万5500円。日当1万円だったというのは2次下請けの勘違いだ」と言い出した。

団交でもI社は「元々、最低賃金5500円の契約。宿代は賃金から引くと従業員代表と協定を結んで」と言った。

労働者に3ヶ月の未払を申告したが、労基署は環境省がやることで労基署がやることではない、宿代を抜

集会の後半には、参加者からの発言が行われ、被ばく労働に携わる労働者の立場に立った運動について発言が続いた。

「現在、除染作業の危険手当（特殊勤務手当）の問題で労働者4人がI社と団交している。今日団交したが、物別れだった。特殊勤務手当は環境省から1日1万円出る。それが2次請けで1日2千円、3次請けで1日

100円になってしまふ。これも違法ではないとIか月分の支払い命令しか出さない。環境省は1万5500円でもかまわないという答え。厚生労働省、環境省のひときはネットワークが力をつけて交渉しないと直らない。

### 国連・憲法問題研究会報告53集

#### 原発事故避難問題から見える

福島の実状

阪上 武

定価 5000円  
発行 国連・憲法問題研究会

会談

座

# 障がい者の支援とは

## 「普通」の呪縛から解放された

### 「コミュニティ」をどうつくるのか

中井達夫(地域の管理・施設化)は超えられるのか  
(本紙1号・2号掲載)の概要

精神医療、地域福祉にかかわって20年。この間「専門職」が配置される社会が出現した。「普通」は「精神障がい者」が《渴望》する計り知れないものとなっている。

自立支援法にある「利用者本位」「契約本位」は、本人が望むサービスを提供するという文言で、言葉にできない「障がい者」の「暮らしの権利」を奪ってしまった。支援の目標は、「普通」の呪縛から解放された、市民を含めた「生活空間」「コミュニティ」の形成である。

西村 中井さんの提起をもとに座談会をしたいと思います。まず自己紹介から。私は32年間障がい者の施設で働き、退職して8年です。フュニシズムの立場に身を置いてきました。

中井 最初の10年は精神科の病院で勤務しながら、いくなかの市民とともに任意団体を立ちあげグループホームをスタートしました。

出席者  
中井 達夫 元精神科病院職員、NPO法人で活動  
東野由美子 障がい者施設職員  
西村 光子 元障がい者施設職員

東野 元々個人的にはいろいろなつながりを持っていましたが、ネットワーク化しようという動きになったのはここ数年です。自立支援法で自立支援協議会を持

つことになって、障がい種別を超えて支援者が一堂に会する機会が増えた。それとは別にもっと草の根的なつながりを持つていくこと。それがいろいろ交錯して、大きな流れにはなっていないけれど。

中井 以前は、病院、保健所のワーカー、家族会、作業所などの、いわば「現場派」のネットワークで、精神だけ、でした。それが自立支援法となり、いま話に出た「自立支援協議会」で他障がいの支援者とも会議の場は増えたのですが、「上」からの視点というのが否めないですね。それでも重複障がいの方の支援で、知的障がいの方のグループホームで現場レベルでの連携は少し出てきたかな、という感じはします。

東野 先ほど言った特別な事情のことですが、うちの法人の支援を受け始めたばかりの女性が妊娠して、出産をするということがありました。女性は以前妊娠した経験があります。そのときは役

#### 当事者の自己決定権

東野 先ほど言った特別な事情のことですが、うちの法人の支援を受け始めたばかりの女性が妊娠して、出産をするということがありました。女性は以前妊娠した経験があります。そのときは役

展開ですね。東野 彼女も相手の男性も「コミュニケーションはとれるんだけど、自分の意思はなかなか出せない。関係のもてる職員が引き出していかないと。繰り返し、ちょっと時間をおいて、違う質問の仕方です。それに、考えるための情報もゆっく

り丁寧の説明して、本当に分かっているかどうか、じっくり確認する必要がある。西村 いきなり核心に入りましたね。当事者の自己決定権をどう評価するかを今日のテーマの一つにしたかったのです。東野 現場に身を置くと、単純に「自己決定の尊重」とは言えない。そこにこそ支援が必要だと思う。中井さんの提起に共感したのは、その辺りのことですね。

#### 「当事者主権」と「自己決定権」

西村 中井さんは障がい者自立支援法の文脈のなかで「利用者本位」は「人権」と矛盾すると述べています。政府・支配者側の意図はその通りだと思います。しかし、1970年代から身体障がい者の解放運動は「自立」を健常者が「普通」にできる生活に置くのではなく、「自己決定」に置いてきました。さまざまな支援を得て「自己決定」すること。最近では上野千鶴子さんが中西正司さんと出

て、「相談の「打ち切り」となっていることがある。だからといって、問いかけに対して何にでも「答え」や「アドバイス」は必要ないし、彼/彼女の人生を決める言葉はどちらも言えない。中西さんや上野さんの「当事者主権」については、自らの考え・主張を言葉にする能力が備わっていることが条件・前提になっているのではないかと、いろいろ感想を持ちますね。それ自体が奪われている人にとっての主体、主権はどうするのか、にぶち当たる気がする。その当事者を取り巻く状況のなかで「どうしたらいいんではないか」という問いに、「こうしたらいい」というのも危ういし、「あなた決めなさい」というのも突き離しとなる。本人と他者との関係で自分自身をどうつくっていくかが問われている、という「一般化しすぎる」。

あるのではないかと。中井 さっきの話の女性も、周りが「産むか、産まないのか」とか「支援します」と言わなくても、誰も産め・育てられる社会であればいいのだから。東野、西村 そう、そう。中井 ただ「当事者主権」と言った場合、そういう社会をつくるのはあなたたち障がい者自身の力ですよ、と聞こえてしまう。むしろ彼/彼女たちを囲む人たちの仕事、課題かなと思うのだけ。

#### 「自己決定」の問題点

西村 それは、パターンリスムです。「自己決定」の問題は二つあると思うのよ。一つは「人権」と「自己決定」の概念は近代に出てきたものであること。共同体で生活の保障を得てきた人たちがそこから解放されて得たもの。しかし、障がい者は近代になっても長いこと「あなたは弱者だから自己決定は無理でしょ」と言われてきた。近代の権利としての「人権」のコアに誰も押し込められないという思いはありますよ。その上たって、現代的課題としての「自己決定」人々は「自己決定」「自己実現」を求めて、疲れ果ててしまった。瞬間、瞬間に選択を求められ、その結果は自己責任となる。

上野さんが当事者主権とは「わたしのニーズはわたしがいちはんよく知っている」、だからわたしのニーズがいつ、いかに、誰によって、どのように満たされるべきかはわたし自身が決める、という権利のことであると言っているのは、気になりますね。「わたしのニーズはわたしがいちはんよく知っている」なんて言えますか？ 私自身だって迷ってしまう。「心地よさ」は帰属する集団で決められることもあるし。それで江原由美子さんの指摘を思い出したの。江原さんは「男と女は差異があるのか？」という問いの立て方を問題にした。「差異がある」と答えれば「平等な扱いはできない」、「ない」と言えば「女性は何でも男性と同様にできま

すね」となる。問い自体が抑圧的であり、既存の権力関係を反映している。そこから言えば「わたしは自己決定できる」という断定も「知的障がい者や精神障がい者、認知症のお年寄り」は自己決定できるのか？ という問いも抑圧的であり、構造的権力の反映だ。中井 問題を一般化しちゃうと、あらゆる言葉——たとえば近代になって生まれた「人権」「平等」——を突き詰めると、こぼれたり抑圧される人なり構造が絶対でくる。でも「人権」「平等」という言葉が作り出されたからこそ、差別的構造が明るみに出されわけ。

そうすると「人権・平等」という言葉が「良い、悪い」「役に立つ、立たない」と単純に言えないし、それこそ「良い、悪い」の問いの立て方そのものが、西村さんの言うように間違っている、とも言える。

東野 近代的な権利とか人権のなかに、はじめからちやつてるものがないってあるということを確認したうえで…

「生活空間」  
「コミュニティ」の形成

西村 で、確かに権力構造を自覚すると言っても何のことやらと思うかもしれないけれど、中井さんの最後の提起につながると思うのね。中井さんは「社会的通念・序列の呪縛から解放された、市民含めた「生活空間」コミュニティ」の形成を呼びかけていますが、それはどのようになされるのか、ということが私の今日話したかった第2のテーマです。

まず、どんなコミュニティをつくりたいのか？  
施設化された地域、変な人を排斥する社会でコミュニティをつくるって、中井 抽象的すぎます。  
中井 その辺りはまだはっきりしているわけじゃないけど…病院で勤務していたときに知り合った人と久しぶりに会って、「あのときお世話になりました。あり

がどうござりました」と言葉かけられるのではなくて、「お互い、ようがなばつたなあ、おれもしんどなってきたわ」と話ができる関係というか、つきあいかたがいいな、と。

地域でグループホームを始めたときから、いわゆる「福祉職」だけではなく、いろんな仕事や経験をつんだ人たちがスタッフを担ってきていて、福祉の仕事に一生懸命のめりこもうとする。それは違うぞ、という

か、それだけではないぞ、と。自分たちは何をしたいのか、それをお互いにオープンにしていく。「私はいい支援者です」というのはやめよう、と。

西村 東野さん、どう？  
自分の生活がなくなるほどやっているのでは？

東野 うん、支援をしていこうというより…おもしろかった。人間そのものを見てくれるというおもしろさ。学ぶ…というの、おもしろいけど。

西村 人間誰でも役に立ちたいという気持ちがあるじゃない。私なんか役に立って欲しい、気持ちいいけど。(笑)

中井 障がいを抱えた人たちは周りに迷惑かけたし、自分は役に立てないという自己評価がある。そのなかでたとえば、私も「あなたと接して勉強させてもらった、教えてもらった」とは言える。でもそれはあくまで支援者と被支援者の関係のなかでの役立ち感だよ

ね。支援者からそのように言われても、言われた方は「世の中」の役に立っているとは思えないだろうな、と思うのね。その「役に立っている」「空間」地域が広がっていくということが課題だと思ってる。

当事者同士の横のつながりとか、支援者とのつながりは20年前とは雲泥の差で広がっている。昔は怒鳴りつけていた役人が多かったが、今は違う。でも、それは「福祉」という限られた空間・領域のなかでの広がりであって、もう一歩広げられないかなあと思う。

たとえば、「孤独死」が問題になっていると、グループホームという障がい者のなかで根づいてきた暮らし方は、「一人前、普通」というふうな暮らしのおまわりもこういふ暮らしの方が暮らしたいんだぞと言ってみてみたいんだね。精神の場合、当事者同士の横のつながりは、われわれ・支援者の知らないところでも、すくく支えあっているのかもしれない。そういうものをわあ〜と表に出して「おいを持ってない」という人たちがいるだけ、障がい者も横のつながりは強いのぞ」と言ってみよう。

支援者が代弁することではなく、当事者自身が言うことだけだ。

それを先駆的にやっているのがべつるの家。向谷地さんや川村先生などの支援者の動きでつくられたことは違いないけど。病名は自

分ですけれども、苦勞を買ってでもやろうと

分ですけれども、苦勞を買ってでもやろうと

分ですけれども、苦勞を買ってでもやろうと

分ですけれども、苦勞を買ってでもやろうと

分ですけれども、苦勞を買ってでもやろうと

分ですけれども、苦勞を買ってでもやろうと

分ですけれども、苦勞を買ってでもやろうと

分ですけれども、苦勞を買ってでもやろうと

分ですけれども、苦勞を買ってでもやろうと

分ですけれども、苦勞を買ってでもやろうと

分ですけれども、苦勞を買ってでもやろうと

分ですけれども、苦勞を買ってでもやろうと

分ですけれども、苦勞を買ってでもやろうと

分ですけれども、苦勞を買ってでもやろうと

分ですけれども、苦勞を買ってでもやろうと

分ですけれども、苦勞を買ってでもやろうと



「サービス」と  
「権利」

「サービス」と  
「権利」

「サービス」と  
「権利」

「サービス」と  
「権利」

「サービス」と  
「権利」

「サービス」と  
「権利」

「サービス」と  
「権利」

「サービス」と  
「権利」

「サービス」と  
「権利」

「サービス」と  
「権利」

「サービス」と  
「権利」

「サービス」と  
「権利」

「サービス」と  
「権利」

「サービス」と  
「権利」

「サービス」と  
「権利」

「サービス」と  
「権利」

「サービス」と  
「権利」

「サービス」と  
「権利」

「サービス」と  
「権利」

分ですけれども、苦勞を買ってでもやろうと

分ですけれども、苦勞を買ってでもやろうと

分ですけれども、苦勞を買ってでもやろうと

分ですけれども、苦勞を買ってでもやろうと



警察による強制排除

# 横堀団結小屋破壊を許さない

## 千葉地裁の強制執行に抗し緊急行動

11月28日、横堀団結小屋を破壊する裁判所による強

制執行が行われた。28日早朝、横堀に駆けつけた柳川秀夫さん(三里塚芝山連合空港反対同盟世話人)、加瀬勉さん(大地共有委員会代表)と支援の仲間が千葉地裁による暴挙に抗議した。

横堀・団結小屋破壊裁判(建物収去土地明渡請求事件)は、成田空港会社の指示のもと原告となった地主・尾野勇喜雄(元横堀農民)によって、09年空港会社が起こした共有地強奪裁判と同時に提訴された。4月25日、東京高裁は原告の主張を認め、三里塚反対同盟に対して「工作物を収去して本件土地を明け渡せ」とし、仮執行も認めた判決を言い渡した。反対同盟と弁護団は、ただちに上告したが、地主は千葉地裁八日市場支部に「工作物収去命令申立書」(7月12日)

を提出。地裁は柳川秀夫さんに「意見があれば書面を10日以内に提出せよ」(7月26日)と通知。8月12日、裁判所は「決定文」を出し、10月29日、千葉地裁の執行官が「11月28日午前7時に小屋を撤去する。それまでに住人は小屋撤去、退去せよ」と通告してきた。28日早朝、「三里塚空港粉砕! 団結小屋破壊阻止!」と坪共有地強奪を許さない! 大地共有委員会(以下「大地共有委員会」)という看板が掲げられた横堀・団結小屋の前に30人の仲間が駆けつけた。「横堀団結小屋破壊を許さない」の横断幕を掲げて、午前6時過ぎから小屋前で開いた集会で柳川さんは強制的手段を取らないという公開シボでの確約を破るようなやり口を批判。午前7時過ぎ、千葉地裁の栗原執行官が多数の作業員・ガードマンを引き連れて、空港側から小屋前に登場。作業員やガードマンは「執行補助者」という黄色に黒字の腕章を着けている。作業員にはアルバイトらしい10代の若者も。執行官が強制執行開始と退去を命ずる文言を小さな声で読み上げる。まもなく警察が警告を始め、機動隊が排除しようと襲いかかってきた。仲間は警察による排除に抗議し、小屋の中で執行官に抗議する柳川さん、加瀬さん、室内に座り込んで強制執行に抵抗する山崎さんに激励のシュプレヒコールを送る。司法権力を使った攻撃で横堀団結小屋は破壊されたが、鉄塔、案山子亭などなど用地内拠点は健在であり、三里塚での土地強奪を許さない運動は続く。



横堀団結小屋破壊に抗議

## オルタ提言の会がシンポジウム

### 世界を変える 浜矩子さんを迎えて



10月20日、シンポジウム「世界を変える 浜矩子さんを迎えて」が明学大で行われた。主催はオルタナティブ提言の会。オルタナティブ提言の会はビープルスプラン研究所の呼びかけで09年から2年間議論を続け、議論をまとめて、昨年『根本(もと)から変えよう—もうひとつの日本社会への12の提言』(樹花舎)を出版した。白川真澄さんはシンポの趣旨として「これまでの見方・考え方を根本から転換しないとやっていけない。経済成長、国際競争力がなければならぬという考えから転換しなければいけない。そして、近代国民国家という枠組みを問い直さないといけない。そういう従来の枠組みからの転換を提言した。『根本から変えよう』はもうひとつの社会のあり方への議論を触発する材料」

「世界を変える 浜矩子さんを迎えて」が明学大で行われた。主催はオルタナティブ提言の会。オルタナティブ提言の会がビープルスプラン研究所の呼びかけで09年から2年間議論を続け、議論をまとめて、昨年『根本(もと)から変えよう—もうひとつの日本社会への12の提言』(樹花舎)を出版した。白川真澄さんはシンポの趣旨として「これまでの見方・考え方を根本から転換しないとやっていけない。経済成長、国際競争力がなければならぬという考えから転換しなければいけない。そして、近代国民国家という枠組みを問い直さないといけない。そういう従来の枠組みからの転換を提言した。『根本から変えよう』はもうひとつの社会のあり方への議論を触発する材料」

私たちの当面する課題は2つ。その1はファウスト病の克服。課題2は子どもじみたふるまいとの決別。ファウストは永遠の若さのために悪魔に魂を売った。日本経済はファウスト病。三丁目の夕日がはやるように、若くなければ成長しなければとファウスト病が深刻。鏡に映る日本の本当の姿は成熟度が高い渋い大人の姿。なのに、その姿を絶対に直視しない。悪魔と絶対に取引してはならない。成熟度が高く富の蓄積がある社会で成長しようというのは、欲の皮が突っ張っている。日本経済にとって必要なのは、成長ではなく分配。豊かな日本経済の只中に貧困問題・格差問題があるのは非常におかしい。

課題2の『子どもじみたふるまいとの決別』とは新約聖書の一節。オバマが09年の就任演説で引用している。大統領選挙では子どもじみたふるまいをしたほうが勝つ状況だが、旧約聖書には「慈しみとまこととはめづりあひ。正義と平和は抱きあふ」とある。人間社会では難しい。領土問題では自国への誠はあっても、相手の事情への慈しみを抱くことはできない。同じことは正義と平和に関しても言える。互いに自分の正義を押し出すほど平和は遠のく。人間世界では慈しみとまこととはずれ違ひ、正義と平和は抱きあわねばならない。慈しみとまこととがめぐりあひ、正義と平和は抱きあわねばならない。子どもじみたふるまいからの決別が必要。日本はファウスト病を克服し、お互いの正義を受け入れる経済社会を創っていくのが課題になる。

そのような経済社会への2つの条件がある。テーマ1はシェアからシェアへ。テーマ2は多様性と包摂性の出会い。シェアの概念の1は市場占有率。もうひとつの概念は分けつ。奪い合いのシェアから分かち合いのシェアへの切り替えがファウスト病の克服、子どもじみたふるまいからの決別につながる。国民国家の枠組みにこだわるのは奪い合いの世界。奪い合いでは、ひとつの地球経済の中でたくさん国民経済が共有することはできない。奪い合いから分かち合いのシェアに発想を変えていかないといけない。TPPというのは困いこむもので分かち合いではない。自由貿易協定は地域限定排他貿易協定と言いつたのが実態を正確に表している。多様性と包摂性が出会う場所が奪い合いのシェアから分かち合いのシェアに変わる場所。世界がまともな方向に変わるために、我々が身を置くべき場所は多様性も包摂性も豊かな場所。今までの日本は包摂性は高いが多様性は低い。そこに戻りたいというのがファウスト病の症状。今のヨーロッパは多様性は高いが、包摂性は低い。ユーロ危機でいがみ合っている。多様性と包摂性が出会う世界の住民の合言葉は国富論を超える。『僕富論から君富論へ』。僕の富が減らないようにするの僕富論、君の富が減らないようにするの君富論。国の僕富論の現われは国産品愛用。企業間君富論のイメージはトヨタ社員が全員日産車を買う世界。こう言つと、『まさか』という嘲笑の渦がフロアから起きる。反論その1は、君富論をよこしまに言い換えると、情けは人のためならず。宴会の席で相手に酒を注ぐこと。反論その2は歴史の教訓。まさかという出来事の連続が人類の歴史。おぞましい『まさか』の実現はヒトラー政権。大阪で同じことが起ころうとしているかもしれない。まさかが起これば、多様性も包摂性も低い象限に引きずり込まれる。しかし、歴史には輝かしい『まさか』もある。まさかには必ず起る。皆さんが君富論普及運動を履行していただければすばらしい方向に世界が変わる。さもなくば大阪市

研究所以外に新聞テオリアの一般購読もできます。一般購読定期購読料金 年間 4000円/半年 2000円

研究所以外に新聞テオリアの一般購読もできます。一般購読定期購読料金 年間 4000円/半年 2000円

研究所以外に新聞テオリアの一般購読もできます。一般購読定期購読料金 年間 4000円/半年 2000円